

大和市立小中学校におけるヤングケアラー実態調査 報告書(概要版)

1 調査概要

(1) 調査の目的

大和市では、ヤングケアラーを把握するとともに、当事者がヤングケアラーの認識を持ち、身近な大人や支援者に相談したり支援を求めたりすることができる関係構築を図ることを目的として、市内の公立小中学校の児童生徒を対象としたアンケート調査を実施しました。

(2) 調査対象者

市内公立小中学校のうち下記の学年の全児童生徒

小学生:5・6年生 3,963名 中学生:全学年 5,515名

(3) 調査方法

- ・ クロームブックを利用したWeb回答方式によるアンケート調査で、回答を希望しない場合や回答をすることが難しい場合は、回答しないことも可能です。
- ・ 原則、無記名ですが、ケアをしており、「相談をしたい」「支援を受けたい」場合のみ記名します。
- ・ アンケート調査後に、支援が必要な以下の支援対象者等を抽出し、学校・青少年相談室と情報を共有します。

①支援検討対象:家族のケアをしており、記名した子ども
②見守り対象:記名していないが、ケアの状況が下記のいずれかに該当する子ども ・ケア対象が父母 ・ケアを一人で担っている ・1日3時間以上のケア ※可能な範囲で、特定できた子どもと面談をします。

- ・ 特定した支援対象者等に、学校が子どもの気持ちに寄り添って面談を行います。
- ・ 面談により、支援ニーズを把握した場合は、支援対象者等の意向を確認し、保護者との面談に進みます。保護者の希望に応じ、青少年相談室又はすすく子育て課が面談し、福祉サービス等のコーディネートを行います。
- ・ 支援対象者等が変化を望まない、若しくは、保護者との面談を希望しない場合は、いつでも相談できることを伝え、見守り続けます。

(4) アンケート調査実施期間

年2回、北部と中・南部に分けて実施しました。

第1回(中・南部) :令和7年 6月 11日 ~ 7月 4日

第2回(北部) :令和7年10月 14日 ~ 11月 7日

(5) 回答状況

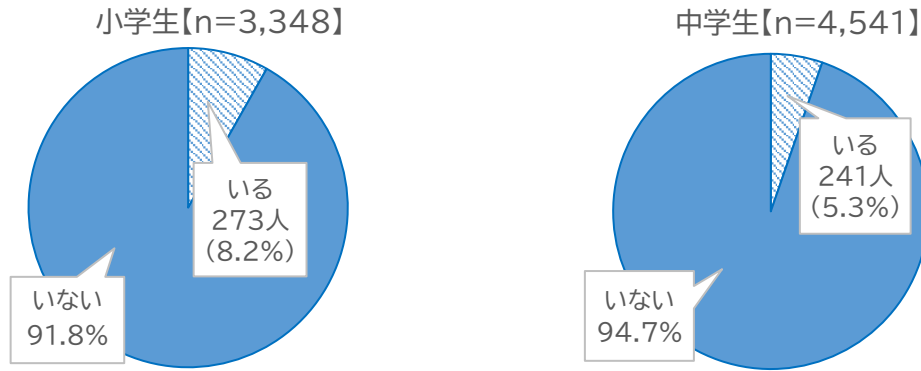
	対象者数	回答者数(回答率)
小学校(19校)	3,963	3,348(84.5%)
中学校(9校)	5,515	4,541(82.3%)

2 調査結果概要

(1) お世話をしている家族の有無

- ・ 家族の中にお世話をしている人が「いる」と回答した人の割合は、小学生で8.2%(273人)、中学生で5.3%(241人)でした。一概に比較することはできませんが、国の調査結果と同程度でした。

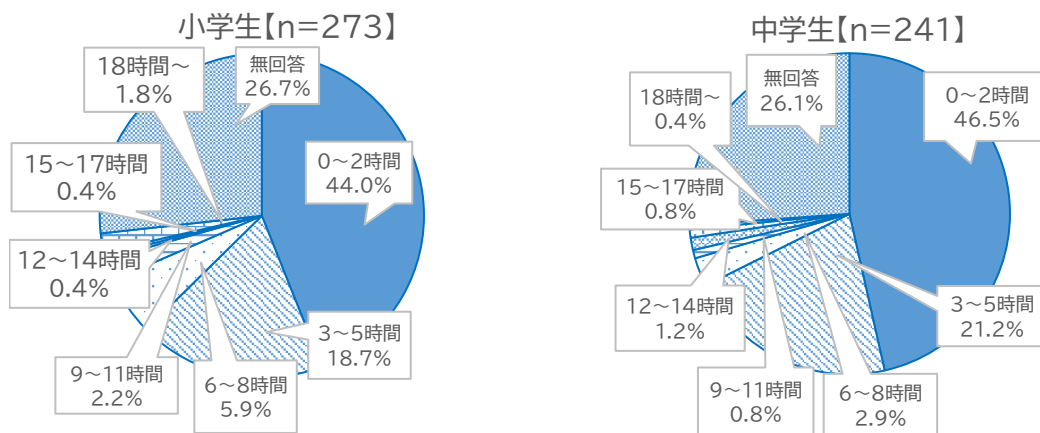
○お世話をしている人が「いる」と回答した人の割合



(2) お世話の対象、内容、時間、お世話の影響

- ・ 家族の中にお世話をしている人が「いる」と回答した人のうち、お世話をしている対象の割合は、「きょうだい」(小学生56.0%、中学生51.5%)が最も大きく、次いで「おかあさん(母親)」(小学生25.3%、中学生21.2%)、「おとうさん(父親)」(小学生17.9%、中学生12.4%)でした。
- ・ お世話の内容は、「見守り」(小学生39.9%、中学生40.2%)の割合が最も大きく、次いで「食事の準備や掃除、洗濯等」(小学生30.4%、中学生36.1%)でした。
- ・ お世話の頻度は、小学生、中学生とも「ほぼ毎日」が半数を超えています。
- ・ お世話の時間は、「0～2時間」と回答した人の割合が小学生、中学生とも最も大きかったですが、3時間以上と回答した人の割合は、小学生で29.3%(80人)、中学生で27.4%(66人)でした。

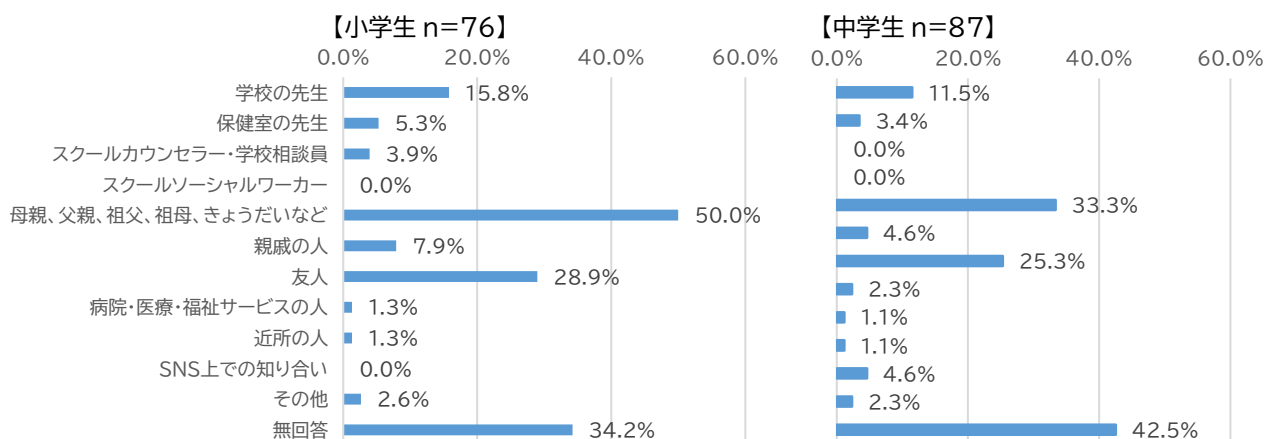
○お世話の時間



(3) 相談をした経験、必要としているサポート

- ・ 家族の中にお世話をしている人が「いる」と回答した人のうち、お世話のことを相談した経験で「ある」と回答した割合は、小学生で27.8%(76人)、中学生で36.1%(87人)でした。
- ・ お世話のことを相談した相手は、「母親、父親、祖母、祖父、きょうだいなど」と回答した人の割合が小学生(50.0%)、中学生(33.3%)ともに最も大きく、次いで「友人」(小学生28.9%、中学生25.3%)、「学校の先生」(小学生15.8%、中学生11.5%)でした。
- ・ お世話のことを相談したことが「ない」と回答した理由については、小学生、中学生ともに「相談するほどの悩みではない」(小学生60.4%、中学生67.5%)が最も大きくなりました。
- ・ 必要としているサポートでは、「特にない」と回答した割合が半数を超え、次いで、小学生は「自由に使える時間がほしい」(13.6%)、「無回答」(12.5%)、「自分のことについて話を聞いてほしい」(9.2%)でした。中学生は、「無回答」(16.6%)、「自由に使える時間がほしい」(10.4%)、「わからない」(6.2%)でした。

○お世話をすることを相談した相手



(4) アンケート調査後の面談について

- ・ 家族の中にお世話をしている人が「いる」と回答した人のうち、支援検討対象は小学生で17人(6.2%)、中学生で32人(13.3%)でした。
- ・ 見守り対象は、小学生で136人(49.8%)、中学生で85人(35.3%)と、家族の中にお世話をしている人が「いる」と回答した人の中での割合が大きいことが分かりました。
- ・ アンケート調査後に、学校へ面談の状況を聞き取ったところ、保護者との面談に至った児童生徒はいませんでした。が、「子どもと面談・声掛けを行った」「見守り対象の特定ができなかった」「引き続き見守りをおこなっている」との声が多く聞かれました。中には、本調査以外でも気になる子どものフォローを行っている・保護者と面談した・関係課と調整している等、ヤングケアラーに対する意識が高まっていることが伺えます。

○ 見守り対象と支援検討対象者数

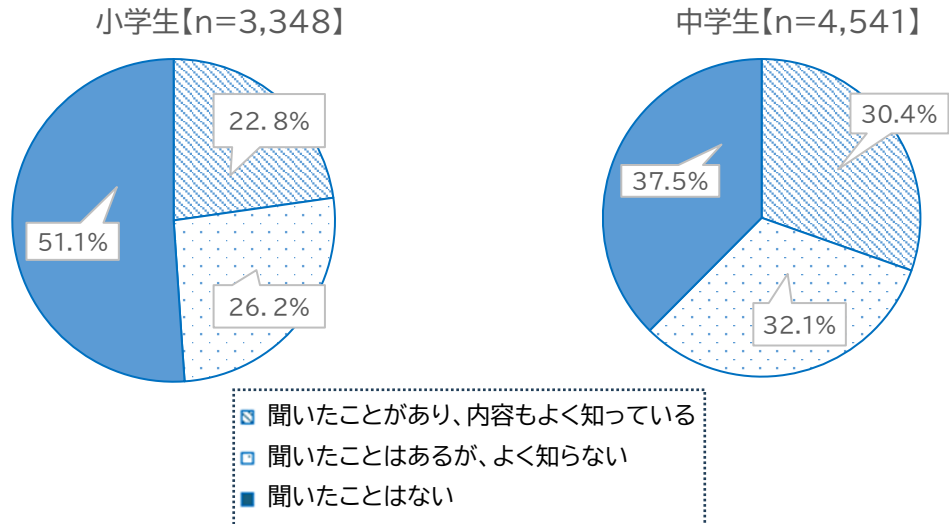
	対象者数	回答者数	お世話をしている家族が「いる」と回答した人	①支援検討対象	②見守り対象
小学校	3,963	3,348	273	17 ※(0.5%) ※(6.2%)	136 ※(4.1%) ※(49.8%)
中学校	5,515	4,541	241	32 ※(0.7%) ※(13.3%)	85 ※(1.9%) ※(35.3%)

※上段:回答者数に対する割合、下段:お世話をしている家族が「いる」と回答した人に対する割合

(5) ヤングケアラーの認知度

- ・ 「(ヤングケアラーという言葉)聞いたことがあり、内容もよく知っている」「聞いたことはあるが、よく知らない」と回答した人は、あわせて小学生で48.9%、中学生で62.5%でした。
- ・ 一概に比較することはできませんが、国の調査よりもヤングケアラーの認知度が高い傾向にありました。

○ ヤングケアラーの認知度



3 まとめ ～今後の支援の方向性～

(1) ヤングケアラーの普及啓発、ヤングケアラーの把握

- ・ ヤングケアラーという言葉を知ったことがあると回答した人の割合が、国の調査と比較して高い傾向にあり、これまでの毎年のポスターやリーフレットの配布等の効果があったと言えるとともに、今回の実態調査により、さらに認知度が高まることが予測されます。
- ・ また、本調査により、一定数のヤングケアラーがいること、実際のケア対象者やケアの内容、ケアの影響、相談相手等が把握できたこと、当事者の思いや希望の一端を知ることができたことは、今後の支援を考える上で、有用な情報となりました。
- ・ ただし、ヤングケアラーという言葉を知ったことがないと回答した人も多くいることから、今後も、普及啓発及びヤングケアラー実態調査を継続していくことが必要と考えます。

(2) 子ども・家庭との関係構築と支援について

- ・ アンケート調査後の面談については、支援対象者等で保護者との面談に至ったものではありませんでしたが、引き続き見守りを行っている学校が多くありました。
- ・ また、本調査以外でも気になる子ども・家庭については、学校で面談を行ったり関係課と相談したりする等のフォローを行っている学校がいくつかあり、本調査が学校の意識の向上につながったものと言えます。
- ・ 個々の事情により、すぐに支援につながることは難しい状況であることが伺えます。引き続き、子どもの気持ちを尊重して学校で温かく見守りを継続し、必要時に必要な支援につながるよう、関係機関に周知していく必要があります。

(3) ヤングケアラー実態調査の方法について

- ・ 今回の実態調査の回答率は、小学校で84.5%、中学校で82.3%であり、小中学校あわせて約1,500人の児童生徒の回答が得られませんでした。
- ・ また、今回の調査は、学校を地域ごとに年度の前半と後半の二つに分けて行いましたが、後半に実施した学校については、対象者へのアプローチの時期が受験の時期と重なる等、学校や児童生徒に負担がかかったことが分かりました。
- ・ なるべく多くの児童生徒が受けられるよう、また、学校での円滑な実施のため、調査の時期や欠席児童への対応等、見直しが必要です。